

八月二日、 天まで焼けた

●母の遺体を焼いた子どもたち

奥田史郎・中山伊佐男著

解説 高木敏子 絵 勝又 進



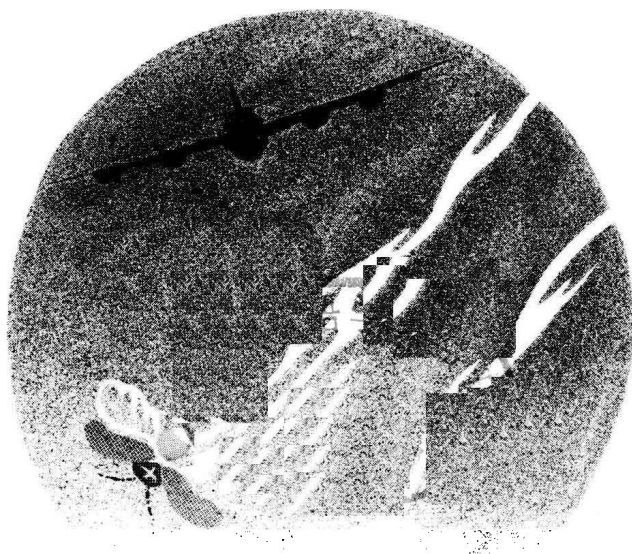
高校生文化研究

八月二日、 天まで焼けた

●母の遺体を焼いた子どもたち

奥田史郎・中山伊佐男著

解説 高木敏子 絵 勝又 進



奥田史郎（おくだ・しろう）

1933年、富山市に生まれる。詩人会
議会員。元『婦人公論』編集部勤務。
詩集『水のない街』（青磁社）『虹の
かけ橋』（現代史出版会）

中山伊佐男（なかやま・いさお）

1929年、東京都に生まれる。麻布高
等学校教諭（生物）。高校理科教科書
（実教出版）を編集・執筆。

高木敏子（たかぎ・としこ）

1932年、東京都に生まれる。処女作
『ガラスのうさぎ』（金の星社）で厚
生省児童福祉文化奨励賞、日本ジャ
ーナリスト会議奨励賞受賞。



八月二日、天まで焼けた

一九八二年 六月 一日 第一刷発行
一九八二年 二月二〇日 第五刷発行

★定価 一一〇〇円

著者／奥田史郎・中山伊佐男・高木敏子
発行所／高校生文化研究会

東京都千代田区猿樂町二―一八

三恵ビル内（〒101）

TEL 03 2295 3415

振替口座番号 東京 6 18956

印刷・製本／凸版印刷株式会社

★乱丁・落丁本については、送料当方負担で
お取りかえいたします。

0036-20011-2471

子どもが、亡くなった親の遺体を焼くのは、

ふしぎなことではありません。

しかし、その子どもがまだ少年であり、しかも、

みずからの手で、母の遺体を焼いたとしたら、

その光景は、どんなにか異様なものでありましょう。

でも——これは、ほんとうにあったことなのです。

父たちが、まだ中学生だったころ、

日本海に面した、静かな北陸の街で——。

●もくじ

絵・勝又進

12歳で母を奪われ *奥田史郎

七人きょうだい——9

東京から来た友達——13

入試発表の朝——18

戦争の訓練——25

ドイツ軍の降伏——28

はじめて見た敵機——31

敵機がまいていったビラ——36

防空壕の中——40

燃えあがった街——43

赤い川——47

脱出——51

悪夢——53

遺体のそばで——56

井戸水だけが生きていた——61

奇妙な行進——65

ぼくを変えたもの——72

呉羽山を越えて——77

遺体さがし——86

再会した「母」——94

仮住まいの生活——102

敗戦——105

欠けた北斗七星——109

再出発——114

悲しみを捨てた町 *中山伊佐男

深夜の交番——119

父の死——122

新しいのち——126

勤労働員——128

東京大空襲——132

富山から来た祖母——136

疎開の準備——140

疎開列車——142

富山中学生になる——147

港での勤労働員——148

無情な隣人——153

市内に戻って——158

空襲——161

炎の海のなかで——165

帰ってこなかった母——170

母をたずねて——179

防空壕の遺体——182

残されたもの——187

遺体を焼く——190

舟橋村で——195

八月十五日——198

授業再開——202

恥の記憶——205

北陸の冬——207

失業者——211

遺骨を抱いて東京へ——214

純情二重奏——218

鷺尾先生——221

妹と別れて——224

くすり売り——227

解けない疑問——234

国家公務員になる——237

大学進学——240

冬の終わり——245

もう一つの「ガラスのうさぎ」——249
*高木敏子

12歳で母を奪われ

●奥田史郎



七人きょうだい

一九四四年（昭和一九年）二月、ぼくは十歳、小学校の五年生だった。この二月の四日、ぼくの家に赤ん坊が生まれた。女の子だった。それで、ぼくの妹は四人になった。

赤ん坊が生まれて一週間めの「お七夜^{しちや}」に、その子の名まえがつけられる。そのころ、ぼくの家では、子どもの名まえをつけるのに、次のようにしていた。

父が、半紙を切って、長さ二〇センチ、幅四センチほどの細長い短冊^{たんざく}をいくつも作る。その短冊に、家族みんなが、子どもも含めて思い思いに申し出た名まえを、父が書いていくのである。

家族だけではない。その場にいあわせた親類の人たちもまた、好きな名まえを「登録^{とうろく}」できた。げんに、ぼくの名まえの「史郎」というのは、東京に嫁^{よめ}いでいた叔母が、ちょうど里帰りしていたときに「登録」したものだそうだ。だいぶ後になってそれを聞かされ、

はじめて長い間の疑問が解けた思いをしたことがある。

というのは、父の名は亨吉こうきち、その父の弟たちは貞吉と達吉、そして生まれてすぐに死んだばかりの兄が英吉で、弟の名が健吉——と、男はみんな○吉きちとつけられているのに、どうしてぼくだけがそうでないのか、ずっとふしぎだったから。

さて、このようにして家族みんながめいめい好きな名前を「登録」したあと、その七、八枚の短冊の中に、父はさらにもう一枚、白紙の短冊をもぐりこませて、神棚かみだにあげる。そして、バンバンと柏手かしわでをうってお参りして、ソォーッと一枚ひいた紙に書いてあったものを、その子の名まえとして決定するのである。それがもし白紙だったら、そのときの短冊はすべてご破算はさんにして、また改めて短冊を作りなおす——。

だから、父が名まえを書いているとき、ぼくたちも、学校で美人で勉強のできる女の子を思い浮かべて、その子の名まえを申し出たりした。

「銀子というのもいいと思うけど……」

「そうだな」

父が記入しようとしたとき、枕屏風びょうぶの向こうで聞いていた母が言う。

「銀子だなんて、芸者みたいな名で、いやですよ」

そのひとことで、銀子は却下^{きやつか}された。

みんなでワイワイ言いながら、だれの申し出た名前が決まるか、父が神棚から一枚ひととき、ちょっと緊張する――。こうして、その妹は、靖子^{やすこ}と名づけられた。

ぼくらのきょうだいは、みんなこのようにして名まえを決められたらしい。父と母は一九二八年（昭和三年）に結婚して、翌年、長男の英吉が生まれたが、十カ月ほどで亡くなった。しかしあと、一年おきに、敦子^{あつこ}、史郎、照子、健吉と、女、男が交互に生まれ、一九四〇年（昭和十五年）に豊子、その翌年に時子、そして靖子と、こんどは女の子ばかりがつづいて、七人のきょうだいとなった。

父も八人きょうだいの四番めに生まれたが、初めての男の子で、小さいときはだいじにされて育てられたという。父は、若いころは東京へ出て絵描きになりたかったのだが、中学校の教師をしていた祖父の強い望みで、金沢の医学専門学校（いまの金沢大学医学部）にすすんで医者になった。医者といっても、細菌学^{さいきんがく}を専攻して、県の衛生課の技師として勤めていた。県庁の構内に別棟^{べんどう}で建っている「細菌検査室」が父の職場だった。

モルモットや白い兎が網かごに飼われ、看護婦さんたちは、よく試験管やガラスびんなどを洗っていた。

ぼくらのきょうだいは数が多く、それに父のきょうだいも多かったから、いたずらをしたぼくらを叱るときも、父はとっさにその子の名まえが出てこなくて、「こら、タツ！あ、エイキチー」などと違う名を呼んだりした。そこで、それをよいことにぼくらは、「ぼくのことじゃありません」という顔をして、ターツと姿をくらましてしまふのだった。父は追いかけてこなかったが、母はよく追いかけてきた。

きょうだいは多かったのに、子どもたちの誕生日のお祝いはいつもキッチンと忘れずに行なわれた。一月に一人、二月に二人、三月も二人、そして五月と十一月に一人ずつ……、その日の夕飯には、赤や黄色のいためごはん（チャーハン）を丸く皿に盛って、真ん中に小さい旗を立てたものが多かった。その日の丸の旗を作るのは、たいいてい、年上のぼくらの役目だった。お皿の脇には、ゆでたまごを半分にして、食紅で目や耳をかいた兎のがのっていた。りんごの兎のこともあった。

戦争がはげしくなって、いためごはんの中に肉っ気がなくなり、グリーンピースがなくなった。靖子の初めての誕生祝いは、そのころには珍しいライスカレーだったが、肉はもちろんなく、代わりにするめを小さく切ったのが入っていた。でも、うれしかった。

東京から来た友達

ぼくは三月生まれだから、一九三九年（昭和一四年）に小学校に入学した。

それより先、ぼくが小学校に入る前から、すでに中国との戦争は始まっていたが、三年生の十二月八日に、さらにアメリカとイギリス、オランダを相手にした「大東亜戦争」が始まった。

最初はずいぶん威勢がよく、日本軍はアメリカやイギリス、フランス、オランダの植民地を占領し、また敵の艦隊などを次々に打ち破って海の底に沈めた。

しかし、一九四三年（昭和一八年）のなかばくらいから、反対に日本軍の敗け^{*}いくさが報じられ、ぼくらのまわりから、いろんな生活物資がしだいに姿を消していった。

品物は極度に不足し、代用食^{だいうしょく}だとか代用品^{だいうひん}ということばがハバをきかせていた。「ぜいたくは敵だ^た」とか「足りぬ足りぬは工夫が足りぬ」という標語がどこにも見られ、苦しい

ことがあっても「戦地の兵隊さんを思え」、そうすれば「ぜいたくなどできないはずだ」と教えられた。

日本軍が一時期占領していた太平洋の島々も、だんだんアメリカ軍に取り返されていき、そこを基地として、B 29爆撃機が日本の大都市を空襲するようになっていた。

東京では、小学校（このころは「国民学校」という名称に変えられていた）の生徒たちが、学校単位で親元を離れて田舎に集団疎開をしたり、親類や知り合いを頼って縁故疎開をするということも始まっていた。

ぼくの生まれ育った富山の街にも、一九四四年（昭和一九年）の夏休みごろから、縁故疎開で転校してくる人たちが見られるようになった。ぼくと友達になった阿部くんや浜中くんも、そうした東京からの縁故疎開組だった。

阿部くんは、三年生のころから学校の休みのときにはいつも、富山にいるおばあさんのところへ遊びに来ていたのだそう。だから、疎開して来たといっても、ぼくたちが友達どうしでしゃべる会話もほとんど「通訳」なしに理解できたし、東京育ちにしては、スキーム意外に上手だった。

阿部くんにくらべると、浜中くんはときどき、ついうっかりと「……しちゃって、さ」